



第15回

【因果な元旦句・車谷長吉(1)】

八木 忠栄

異能の作家として有名だった車谷長吉と、短期間だが同じグループ会社で、私は彼と同僚だったことがある。

彼の小説などについては、ここで改めて触れるまでもないことだが、彼はじつは特異な俳句もたくさん作っていた。生涯に句集と名のつくものは四冊刊行しているけれど、他の本にも俳句はダブって収録されている。

身びいきではなく、私は以前から長吉の俳句が好きだったし、評価も高かったのだが、今回は長吉の俳句のうちから「元旦」を詠んだ句にスポットを当ててみたい。

元旦や柱時計の音がある

元旦や枯木見上げて誓ひけり

元旦や凍水すゝる老いた妻

これが長吉の「元旦」である。因果としか言えない。めでたさや晴れやかさなど微塵もない元旦の句である。俳句も紛れもなく長吉の世界だった。「人間の真・善・美・偽・悪・醜を書く」のが作家であり、「句の構想を練っているときが一番楽しい」と長吉は書いていた。